

OCUAC

大阪市立大学山岳会会報 No.46 2008. 6. 18

目次

<u>パタゴニアの旅</u>	佐々木 惣四郎	2～3頁
<u>ニュージーランド トレッキング</u>	上田 忠士	3～5
<u>ある日の冬壁</u>		
『大山北壁別山バット以外中央稜登攀』	武部 秀夫	6
<u>山スキー</u>		
私の山スキーの楽しみ方	田中 博之	7
蓮華温泉雑感	上田 忠士	8
<u>久しぶりに大阪での集まりに参加して</u>	小倉 哲也	9
<u>ネパール トレッキング</u>		
ティリツォ湖とアンナプルナ・サーキット	山田 裕敏	10～17
ヒマラヤ高度順化トレーニング	伴 明・福山 昇二	18～19
<u>総会が開催されました</u>		
総括報告、総会案内の返信欄より、会計報告		20～23
<u>「森本レター・ファイル」が山岳会に移管されます</u>		
「森本レター・ファイル」とは	廣谷 光一郎	24
「森本レター・ファイル」を読んで	清原 鉄也	24～25
廣谷氏インタビュー(その1)	奥田 寛	25～27
<u>日本百名山を完登して</u>	澤井 弘忠	28～30
<u>写真集</u>		31～32

パタゴニアの旅 (2008/1/15-2/9)

佐々木 惣四郎

パタゴニアは、南緯40度以南の地域にて、アルゼンチン、チリにまたがり日本の2倍の広さを有している。関空からサンフランシスコ 10時間、ワシントン迄6時間、ブエノスアイレス迄10時間、トレック基地のカラファテ迄4時間で、合計30時間の飛行時間となる。

カラファテからロス グラシアス国立公園にてペリ ト モレノ氷河及びフィッツロイ山をトレックして、その後チリのパイネ国立公園にてトーレス デル パイネの3岩峰からパイネ グランド山(パイネの角)、グレイ湖を巡る いわゆるWトレッキングコースに10日間の予定で準備して、久しぶりのワイフとの旅に張り切って臨んだ。

結果は、ワイフがカラファテにてペリ ト モレノ氷河にいった後、風邪にかかり、ここで5日間の安静が必要な事態となり、フィッツロイとトーレス峰トレックは、割愛せざるを得なくなり、6日間のテント生活でのトレックに終わった。度肝をぬかれたのは、カラファテが荒涼とした原野にある町で、まわりが余りにも荒涼の名にふさわしい様相で、多くの湖が周囲に点在する事であった。

カラファテからモレノ氷河のツアーに参加し、世に名高い氷河に対面。この氷河は、ネパールの懸垂的なものでなく、比較的低い山から大平原をなしながら氷河湖に流れ込むもので、氷河末端の20-30mの壁が、比較的煩雑に大きな音をたてて崩れおち、素晴らしい風景を作りだしている。この後、エルチャルテンに行き、フィッツロイにトレックするべく手配すんでいたが、この夜からワイフが発熱し、5日間動けなかったのである。

1月23日ワイフの風邪がやっと回復し、カラファテよりパイネのデプトに7時間かけて行き、ここからペオネに30分のペオネ湖の船旅であった。ここをベースキャンプとしたのである。このテント場は、“パイネの角”とパイネグランデを目前にした絶好のテント場でペオエ湖の真青色と特異な形の山とうまくバランスが取れており、夏の涸沢のテント場以上に多くのテントがあった。

翌日グレイ湖沿いにグレイ氷河が広がるキャンプ場まで4時間かかった。途中のパノラマ景色も良かったが、肝心のグレイ氷河のスケールはそれ程でなく、ガッカリさせられた。モレノ氷河が大きかったので期待はずれの感であった。

グレイ湖トレックより、今度は小生が風邪にかかり、翌日は沈殿。日中の暑さは半端でなく、テントにおられず、木陰へ避難して過ごす。

1月26日フランセス谷に入る為、イタリアキャンプ場に3時間かけて移動し、翌日フランセス谷を3時間かけてトレック。パイネの角の連峰を始めとして、パイネグランデの氷河を抱く山並みは圧倒的に素晴らしい。ヨーロッパアルプスともネパールヒマラヤとも違う様相で、岩峰が明確な2層の色からなり、世界の絶景に類すると思います。

その後、トーレス行きは諦めてベースキャンプに戻り、再び船でデプトまでもどり、カラファテへの帰りとなった。帰り途中、公園入口付近からトーレス3峰が望めて感激！迫力ある姿で小林先輩の撮られた写真を思い浮かべた。またこの付近にはグアナコが多くいた。今回は小生にとって2度目の訪問であり、トーレスの麓に行けなかったのは残念であった。カラファテまでチリ国境を越えて、

再び大平原を6時間かけてアルゼンチンのカラファテに午後10時過ぎにもどった。日の入りは午後9時でようやく暗くなり、今回のトレックは終わった。

今回は高度食中心に10日間の食料を持参したが、ホテル滞在も含め全食料を使い切った。重量は左程ではないが、かさばった。又 テント場におおきなペオエ小屋がありチリペソ(\$ 450ペソ)で飲物中心に食料の調達ができ、ワイフはワイン、ビールを思いきり楽しんでいた。

トレッカーにとっては、格好のコースで5-6日にてWトレックを全部消化出来る。高度差は500-800mで比較的楽である。

<ブエノスアイレスの夜のタンゴ>

タンゴの夜なくしてブエノスは語れない。ブエノスに5泊したうち4回 タンゴを楽しんだ。一番良かった店は、セニユール・タンゴ、2番は、ラ・ベントナ、3番は、コル・ビエオ・アルマセンで、最後はエル・グランデイであった。夫々に特徴があるが、順位は上記で、アコーディオンがタンゴには不可欠、この迫力とダンサーの踊りのバランスがキーポイントと思われた。

圧巻は勿論タンゴダンスであるが、地元フォルクの音楽とショーがとっても良かった。料金はデイナーなしで170ペソ(\$55)でデイナー付き\$80にて各店 共通である。店によって雰囲気は大分違うので良い店に行く必要がある。

ブエノスからイグアスにゆき 滝の迫力に魅了されて その後 パラグアイに行き 2日間過ごし、最後にブエノスにもどり、同一ルートで関空に降り立つ事になった。

<旅のメモ>

ペリト・モレノツアー料金	90ペソ(\$30)	入園料	40ペソ(\$12)
エル・チャルテン行き バス往復	100ペソ(\$33)		
カラファテパイネ バス往復	320ペソ(\$100)		
デプターペオエ 船 片道	1100チリペソ	往復	1700チリペソ(\$80)
テント1泊	3500ペソ(\$8)		
出国税	アルゼンチン \$18	パラグアイ	\$25

ニュージーランド トレッキング

上田 忠士

ニュージーランド国民は自然の中に身を置くことが好きな国民のようで、自然を楽しむ Walking 道(この国ではトラックという)が、長短全国いたるところにある。それらは自然を愛する国民、国(DOC)によって保護、管理されている。トラックの中でも Great-Walk といわれているものが9カ所あり、その中でも有名なミルフォード、ルートバーンには世界中のトレッカーがやって来る。トラックはいずれもよく整備されており、安全なコースとなっている。トラックに入ると耳にするのは川の瀬の音と鳥のさえずりだけである。ハイキングといった感じであり、入山者数も制限されており、

従って少なく静かな歩きが楽しめる。トラックの長さはミルフォード 54 km、ルートバーン 33 km であり、踏破には山小屋を利用し、3,4 日かかる。費用が高くかかるがこれらにはガイド付きツアーが催行されており、誰でも楽しむことが出来る。ガイド付き Walk 以外は個人 Walk、自分で食糧、寝袋、炊事用具一切を担いで歩かなければならない。日本の山小屋のように、食事や寝袋のサービスはない。あるのはトイレ、ベッドと水だけである。私は昨年、今年（2008 年）と Great-Walk をいくつか歩いたが今年のトレッキングを記録調にまとめてみた。

* ラキウラトラック：36 km

このトラックは南島の南方海上 35 km にある人口約 400 人の自然のままの姿を保っているスチュアート島にある。

2/17 初日 曇り一時小雨、午後晴れ。

起床 7:00 .いよいよ今日からグレート Walk のひとつラキウラトラックだ。天気はまずまずである。DOC でハット券を購入（ひとり一泊 10 ドル）して小雨の中を 9:15 出発。リーベイまでは自動車道だ。到着 11:00.ここから島の最高峰「アングレム」が遠望された。

小休止のあと海岸沿いに歩く。雨も止み、誰とも会わず静かな歩きと海岸美を楽しみキャンプ場着 13:40. 今夜の宿ポートウイリアムハット着 15:15.

収容人数 24 名。今夜の泊まりは 15 人ぐらいであった。管理人は不在。

2/18 2日目 晴れ

起床 7:00. 即席の朝食だ。トレッキング中は美食と言うわけにはいかない。出発 8:40. 天気がよく、先頭を歩く M はペースが速い。苔としだで覆われた山道だ。整備はよくされており、植生保護のため木道が多い。標識も要所にあるだけで、DOC の管理するトラックらしい。日中歩くと暑いぐらいになるが、汗をかくほどのことはない。最高地点パターソン湾を見渡す展望台（300m）でランチ。イスラエルの若者 5 名もやって来た。ノースアームハット着 15:10. M, Y は疲れたのか午睡。18:00 から夕食料理（？）開始。夕食後若いイギリス女性とトランプを楽しむ。このハットも管理人不在。今夜も日本人は我々 3 人のみ。M の登山靴の底が剥がれてきて心配だ。

2/19 最終日 晴れ

起床 7:10. 今日もいい天気だ。出発 9:00. やや下り気味に海岸線に沿って歩く。ほとんど人に会わなく、鳥のさえずりが聞こえるのみ。海に出張ったカイピピで大休止。ここは群青の海と濃緑の樹林に囲まれた美しいところだ。ここから 1 時間の歩きでトラックの終点。

DOC に帰着を連絡。

夜はトリプルのルームでビールとスパークジュースでトレッキング無事完遂を祝った。

* ミルフォードトラック：54 km

南島の南西、フィヨルドランド国立公園にある変化に富んだ景観と滝や湖などを結ぶトラック。人気が高く世界中からトレッカーがやってくる。

2/22 初日 曇り、晴れ

起床 7:00. いよいよミルフォードの始まりである。YH からバスの出発する DOC まで歩く。バス出発 9:45. 15 人ぐらいの乗客。テアナウダウンで下車、ボートに乗り湖の北端グレードワーフへ向う。約 1 時間のクルーズだ。ボートでは少人数の日本人 2 グループと一緒にだったが、彼らはグレードハウス周辺を散策する日帰りのトレッキングである。彼らに見送られて 11:50 歩き始める。

M, Yの荷物は7, 8 kg、Tがワイン3本もあり15 kgぐらい。

天気はまずまず、広く平坦な道がクリントン川に沿って樹林の中を続く。ガイド Walk の宿グレードハウスは近い。大きな立派な建物だ。我々フリーWalker は素通りして上流へ進む。本道から離れ Red beach tree ,湿地帯 Walk にも寄って、今夜の宿クリントンハット着 13:40。4 km 弱のラクな初日であった。40 人収容のハットは満員。管理人の話 (Hut talk) が 7:30 からあり 10 カ国以上の国から来ていることが紹介された。

2/23 2日目 小雨

起床 5:50 真っ暗だ。Tが一番早かった。小雨なので雨具の上着だけ着て出発 7:20。Mの先導でクリントン川に沿って歩くが、早いピッチである。1時間ほど歩いて雨具のズボンをはく。ヒレレシェルターで小休止 9:30。バスストップシェルターでランチ 11:15。小雨の中を歩くが左右の山肌に行く条もの細い滝が出現、高度差もあり素晴らし景観である。雨もまたいいものである。道はやや急になって来たが、2時間弱の歩きでミンタロハットに到着 13:20。6時間 18 kmの歩きであった。ハットに到着すると雨脚が激しくなり明日の予報も強雨との掲示あり。マッキノン峠の通過が心配である。就寝 21:00。夜中も強い雨であった。

2/24 3日目 マッキノン峠越え。小雨、曇り、やや風あり

起床 6:00。心配していた雨も小雨になりほっとする。雨具に身を固め 3 人とも体調よく元気に出発 7:30。今日は Big day、登り 550m、下り 970mの行程だ。マッキノン峠 (1073m) までは電光型の登りが続く。風もあったが問題なく到達 9:20。マッキノン記念碑で写真撮影。これから下るアーサー川も眼下によく見え眺望を楽しむことはできたが、遠望はきかなかった。長い下りをゆっくり歩く。ガイド Walk のクイントンロッジ到着 15:30。このころは青空も出てきた。M, Yはダンプリンハットへ急いだが、Tはひとり当国一番のサザンランド滝を見に行った。往復 1時間 20分。雨後であり水量は多くまさに大瀑布、落差 580m。圧倒される迫力である。ダンプリンハットに 3 人集合したのは 15:30。その後また大雨、行動中小雨であったのはラッキー。やはり雨の多いミルフォードである。明日はどんどん下るだけ、ワインで夕食をとり、Hut talk に出席もせず、7:30 シュラーフに入った。今日の歩き 14 km。

2/25 最終日 小雨、曇り

起床 6:00。今日も小雨だ。14:00 発のボートに乗らなければならないから、皆な早く出発した。我々は急ぐこともないと考え 7:30 出発。遅い方だ。ひたすらアーサー川に沿って歩く。今日は 18 kmもある。ボートシェッドシェルターまで 1 時間半。ここで小休止。スイング橋を渡って左岸に道が伸びている。マッケイ滝 9:20。標識がこのあたりなく残りどのくらいか分からない。右に美しいアダ湖を見ながら進む。ジャイアントゲートシェルター到着 11:20。多くの先発者が休憩していた。我々も休憩。あと 5.5 km、1 時間半の標識があり、先の目途が立つ。サンドフライ着 13:10。3泊4日、54 kmのミルフォードトラックが無事完了。MとYはよく頑張った。満足感で満たされている様子であった。到着の頃は青空も見えて暑いぐらいになった。ボートでミルフォードサウンドへ到着。その夜はオーバーナイトクルーズに乗船、船内で無事踏破を祝った。

メンバー：上田 忠士 (T)

上田 美枝子 (M)

吉田 佐代子 (Y)

ある日の冬壁

「大山北壁別山バットレス中央稜登攀」

武部秀夫

西日本で日本海に一番近い名山があります。日本海に近いということは、冬季の西高東低の気圧配置になったとき激しい雪山になります。その山の名は「大山」です。特に北壁はもろに風雪が当たるので、厳しい山になります。冬季の晴天日を狙って、多くの岳人たちが、その山に今でも向かいます。岡山市に住んでいますので、3 時間あれば、北壁の元谷に立つことができます。大山の冬壁は、小ぶりですがまな美人の山でしょうか。好きな山のひとつです。2006 年の岡山労山隊で行って失敗した「ゴザルカンリ(6275m)」登山が終わってから、冬の北壁をよく登ってます。北壁には、東端の墓場尾根から西端の八合尾根まで、10 本のルートがあります。毎年 1 月から 3 月の間、3~4 本のルートを楽しんでいます。地元山岳会の「岡山ランタン同人(岡山県山岳連盟加入)」パーティーで岡山大学山岳部 OB の人たちをザイルパートナーにしています。今冬のある日の登攀は、雪の状態悪く 10 時間かかりました「別山バットレス中央稜」が印象でしたので、記録報告します。

2008 年 2 月 3 日(日) 岡山(4:00)~大山元谷(7:00)~取り付き(9:30)~登攀終了
(16:10)~元谷(17:15)~岡山(21:00)

岡山ランタン同人パーティー(山崎、武部)

天気 晴れのち吹雪

記録 岡山をいつものように早朝発。今日は別山バットレスには誰もいない。東となりの弥山稜には 3 パーティー、滝沢リッジに 1 パーティーの状態。元谷避難小屋からは、腰近くまでのラッセル 2 時間半。トレースあれば 1 時間半程度で楽々いけるのだが。相方も大学山岳部出身なので、ラッセルは強い。交代交代で進む。取り付きで、ハーネス等つけ登攀開始。壁の部分は 9 ピッチ。下部 3 ピッチはコンテですすむ。ここは雪稜で急峻だが灌木もある。4 ピッチ目から傾斜が増す。バットレス状の中央の急峻なリッジとフェイスになる。支点が灌木とピッチ切れ目のボルトだけで、高度感あるので、少しはびびるところもある。8 ピッチ目が核心部、リッジ、雪壁、岩(50センチくらいの灌木つかんでのハングあり)を越すと、別山ピークへの 1 ピッチ雪壁トラバース。ここで 14:30 吹雪に急変。吹雪で視界 10 メートルの中、ピークからは一旦クライミングダウン 1 ピッチ。ナイフリッジがさらに 2 ピッチ。晴れていると、この都合 3 ピッチも高度感があるところだが、今日はガスでかえってよかった。後は高度差約 150m を登ると主稜線にでた。16:10. ガスの向こうに朧のような幻想的な太陽が少し見える。一般ルートを即下山。6 合目避難小屋でアイゼンはずし、横をトラバースして六合沢へ尻セードで一挙に元谷へ。

独言 冬壁は、すべてを忘れて集中できるところ。こんな行為でストレス発散しているとしたら、山に申し訳ない。山に抱かれていることに感謝。感謝。

わたしの山スキーの楽しみ方

田中博之

もともとスキーには興味がありました。学生時代に、片岡さんと梅池で馬ノ背しか滑らないというスキー訓練をして（コースからはみ出して落ちたりもして）、それなりに鍛えてから山スキーを始めたように記憶します。

4回生の時に医学部山岳部で尾瀬から燧岳と平ヶ岳に行ったのが、山スキー事始めだと思います。当時はワイヤを靴に引っかけるタイプのジルブレッタだったはずです。張り付けシールはあったっけ？

伊吹山には昭和60年（1985年）3月に行ったという記録が残っています。スキー場はすでに営業終了でしたが、スキー場上部からは雪が残り、スキーは担いで登ったようです。頂稜からの滑り出しは怖くてキックターンを繰り返したはずです。今では考えられませんが、だれにも会いませんでした。

その後、高校山岳部時代の後輩と会って、一緒に昭和61年（1986年）ゴールデンウィークに焼山北面台地と白馬大雪渓を滑ってから、本格的（何が本格的かは分かりませんが）に山スキーに取り組むようになりました。つまり、わたしの山スキー仲間は、その後輩と後輩の友人たちです。

平成初期には柳又谷ゴルジュを滑ろうと目論見（発案者は片岡さん）、1995年にゴルジュを迂回するコースで猫又山～朝日岳に抜けましたが、このときに他のパーティが柳又谷ゴルジュをたぶん初めて滑っています。あまりおもしろくはないようです。1996年には黒部川上廊下をスキーで横断しました。記録といえるかどうかは分かりませんが、なんとか記録になりそうなのはその程度でしょうか。

最近はいい景観にこだわっていますので、スキーは二の次です。わたしとしましては、剣岳や穂高岳が見えるのがいー景観と信じていますので、超お勧めコースは、以前も書きましたが、立山御前谷～内蔵助平～剣沢～池ノ平山、仙人山～大窓～白萩川～馬場島です。

今年は平湯周辺に二度ばかり行き、猫岳、四ツ岳、焼岳を滑りました。こちらは穂高が美しくてお勧めです。とりわけ中ノ湯に泊まって焼岳狙いはなかなか優雅でした。（実際は焼岳に登ってからその夜に中ノ湯に泊まり、翌日は弁当を作ってもらって早朝出発して、平湯から四ツ岳に行きました。四ツ岳は標高差1400mで厳しいです。）中ノ湯がけっこう高いところがあるので、焼岳はアルパイトも比較的軽くてすみすみます。日曜日が高気圧で覆われそうな週末に中ノ湯に泊まり、翌日、焼岳に登るというプランは是非もう一度やりたく思っています。もっともそう簡単に宿が取れるかどうかは分かりませんが、また、すぐそばの十石山は白骨温泉に宿泊して登るというプランを考えています。

まあ、かくじい趣味的山スキーが最近のわたしの楽しみ方ですが、先鋭的山スキーの現状は、雪のあるところならどこでも行くぞというノリで雪壁登攀の対象となる壁が次々に滑られています。さらにもうひとつの方向性はスキーの機動力を利用して、厳冬期に槍ヶ岳日帰りとか黒部横断一泊二日の旅とかがなされています。最近、槍穂高を日帰りしたという報告もありました。なかなか厳しく危険ですが、若い方はそういう方向で頑張ってもらいましょう。

山岳会では梅池スキー合宿をされているそうなので、ぜひ馬ノ背でトレーニングして、伊吹山の頂稜からスキー滑降可能レベルまで鍛えていただき、来年は中ノ湯泊焼岳とか、白骨温泉泊十石山に参加していただきたいものです。

蓮華温泉雑感

上田 忠士

蓮華温泉は白馬岳の北方にある山間の温泉であり、雪解けが進む6月下旬、夏季になってようやく定期バスが入ってくる。雪倉岳、朝日岳への登山基地になっており、周辺は静かな山歩きのできる場所である。この豪雪地帯は古くから山スキーの活動の舞台であり、多くのスキーヤーが春スキーを楽しみ、温泉に浸かり語らうところである。積雪期登山の対象になるのではなく、山スキーヤーだけの世界であり、4～5月にかけてはまさに桃源郷である。その多くは拇池スキー場のゴンドラを利用して、拇池平まで登り、さらにロープウェイを利用して自然園まで登る。ここから山スキーの世界になる。自然園から1時間もシールで登高すると天狗原である。ここはただ広く標高 2200m、視界不良の時は迷いやすいところだ。ここから蓮華温泉へは北に向かって振り子沢を滑降するのであるが、我々もそうであったように、滑降を楽しむために、さらに 30～40 分かけて白馬乗鞍岳まで登る。ここでシールを外しスキー滑降に入るが、傾斜 35 度以上あり、雪の状態によっては滑降を楽しむどころではない。ターンが出来なくキックターンで方向転換を余儀なくされる。

もっとも雪山をピッケル、アイゼンで歩いた我々山岳部 OB はスキーが上手なはずがない。昨年 2007 年 3 月は振り子沢を赤布を探し、地図を見ながらルートファインディングして滑降、蓮華温泉に浸かり我々を含め泊り客 5 人という静かな一夜を過ごしたものだ。そして翌日は木地屋部落まで長いコースを下った。途中 2 箇所登りがあるが、全体としては山スキーの楽しめるコースである。今年 2008 年 3 月も 3 人で同じルートを辿るつもりで出かけたのであるが、滑降ルートを誤るという大失態を演じ、時間切れでピバーク、蓮華温泉には辿り着けず拇池に引き返したのである。3 人の内ふたりは昨年同じコースを経験しておりながら・・・。

白馬乗鞍岳の急斜面を滑降、天狗原から北に向かって振り子沢へ入るのが蓮華温泉へのルートであるが、誤って北東に向かって唐松沢へ入ったのである。真新しいスキーで滑ったシュプールもあり、何ら疑うこともなく沢を滑降して行った。去年は見かけたルートを案内する赤布がない。景色に覚えが全くない。磁石と地図で現在地を確認したら、どうやら我々はルートを誤っている！ そう思えば左手は千石揚尾根、右は山の神尾根で我々は唐松沢を下っている。千石揚尾根を越して蓮華温泉へ下ることも考えられたが引き返すことにした。標高 1600m、時刻午後 3 時、やや遅い決断であった。シールを付け、天狗原までは辿り着きたいと歩き始め、千石揚尾根に取り付いたが、歩みは遅々として進まない。尾根上に出た時は薄暗くなったが、ガスの晴れ間に雪倉岳、朝日岳が見え、遠くに天狗原も見え現在地が確認できた。そのうち暗くなりヘッドライトを点けたが、天狗原まで辿り着くことは困難と判断、6時半ピバークを決断した。千石揚尾根標高 2000m の尾根上の森林の中で大きな木の根元に凹地（雪上）を堀り、スキーを敷き、3 人ツエルトを被って横になった。持っていたワイン 1 本を 3 人で飲み、体を温めた。おいしかったこと。

幸い気温もあまり下がらず、夜中小雨、小雪があったがたいしたことなく朝を迎えた。5 時 40 分行動開始。視界は 100m 前後であったが、ツアーコースらしく標識板がところどころにある。天狗原入り口 7 時 50 分到着。天狗の祠等到着 8 時 50 分であった。視界が依然として悪く、自然園への滑降はヘリスキー用の大きな標識幕を探しながらゆっくり下った。拇池スキー場に入ってから飛ばしてゴンドラ乗り場へ到着したのは 12 時であった。非常時連絡先になってくれていた鷺田さんには大変ご心配をお掛けした。

天狗原から蓮華温泉へ向う場合、今春のケースで言うとヘリポートへ続く案内幕を右に見て、方向を磁石で確認して、北に向かってやや傾斜のある振り子沢を下っていくことが肝要である。道中、ルートを示す番号付きの案内板が次々と現れるので正しい道程であることが確認できる。

メンバー；上田 忠士、伴 明、山田 裕敏

久しぶりに大阪での集まりに参加して

小倉 哲也

山田さんからメールを受け取りました。

山岳会会員各位

2月中旬を過ぎてもまだまだ積雪が増えるという、心強い冬の展開となりましたが、皆様如何お過ごしでしょうか。さて、久しぶりに今春学校を離れOB会員入りされる方々が出てきましたので、上堂さんのご協力を得て、卒業祝いを兼ねた歓迎の催しを下記概要にて予定しました。

多数の参加連絡をお待ちします。

計画概要

3月16日(日) 葛城山～金剛山～千早赤坂村～河内長野

18時から河内長野の上堂陶芸道場にて祝宴

このメールの仕掛け人は大アネゴ、こと長谷川さんでした。

山田 さま

こんばんは。

「新規会員歓迎登山」のお誘い拝見しました。

2月末から4月のはじめまでメキシコ在住の小倉哲也さんが来日されるので、

「ぜひ出席してください」と声をかけてあげてくださいませんか。

私は遣り残した仕事を片付けに那須に一週間出かけて、留守にする予定です。

長谷川 ふみ子

2月末の地球の裏側、グアダハラ市(メキシコ)はもう初夏の気分で、昼間の気温は30度を越えます。当市は台湾とフィリピンの間辺りの北緯17度に位置し、上高地と同じ標高の高原にあります。メキシコの中では気候温暖、風光明媚な土地として知れわたっていますが、今、5月、昼間は35度を越え、温暖でなんや、と考え込みます。もう間もなく40度を超える事になるでしょう。普通、6月始めに雨期に入り、明け方と夕方に激しい雨が短時間だけ降り、涼しくなります。こうなると、最高27度、最低10度の快適な気候が10月頃まで続きます。クソ暑い日本の夏にはこちらにお越し下さい。

杉本村のゲストハウス(大阪市大外国人用の宿舎)に起居していたので、天王寺経由で河内長野まで手探りで行き着き、下車したものの、駅とその周辺は物凄い変わりぶり、記憶の片隅に在ったのとはエライ違い。それにしてもインターネットは賢い。チャンと上堂さんのアトリエにたどり着けました。

待つ事、半時間、懐かしい面々が続々現れたけど、ノーミソが不足して、藤本、山辻、上堂、伴、山田さん位しか思い出せない。島川、澤井、福山さんはそう言えば、、、。苑樹夫人、現役の澤、和田、藤井、松本さんにお会いできて嬉しかった。

懐かしい仲間を肴に酒で盛り上がり、その上、最高級のご馳走を頂いて時の過ぎるのも忘れる程でした。

ティリツォ湖とアンナプルナ・サーキット

山田 裕敏

今度のトレッキングは、マルシャンディ川を遡りその左岸に聳える二つの6千m峰を登った後、トルン峠を越えてムクチナートからジョムソンに至り帰路は空路で、との計画を佐々木さんより示され、その山域ならトルンパスではなくティリツォ湖越えでジョムソン入りしたいと一部変更を申し入れた。

泊山岳会の薬師義美さん達がティリツォ・ヒマールを試登されたのが1965年秋、この折のボカラからアンナプルナ山群を一周する所謂アンナプルナ・サーキットとその他域への旅は「遥かなるヒマラヤ」と題して1969年5月に第一刷が発行されている。ヒマラヤに関する書籍は多数読んだけど、妙にこの本のティリツォ周辺部分が印象に残っていて、いつか訪れたいものと40年間程も暖め続けていたので、是非この際ティリツォ湖越えをとお願いした。そして無事ジョムソンに到着し日程に余裕があったので、思いがけなくカリ・ガンダキ流域を東北にムクチナートまで、下ってはタトパニまで大きく辿り、最終日にはプーン・ヒルの日の出まで拝め、薬師隊とは逆廻りながら、アンナプルナを略一周できた嬉しさに、こういう表題で今春のトレック報告を書き記すこととした。

4月14日 01:30 関空発、バンコック経由で昼過ぎにはもうカトマンズに到着。大阪でヴィザを取得していた為スムーズに空港を出て、エージェント社長テンディの車でホテル入りし、明日からのトレック打合せをする。佐々木さんの馴染みのシェルパ、ミンテンバも同席する。彼はインド隊のマカルー登攀隊に加わるため今回は別行動となる。

テンディからわが隊の構成について説明を受ける。サードはフルテンバ 33歳、セカンドシェルパはアン・ダウ 25歳、コック兼案内役として昨秋ランタン・トレックを共にしたカミ・トン・ドウ（以下アンカミと呼ぶ）、キッチン・ボーイ2名、キッチン・アシスト1名、ポーター11名 計17名、これに我々を加え19名の大部隊である。

15日 6時からの朝食を終え、7時には大通りに待機している中型バスに乗り込む。ここでフルテンバ以下今回のメンバーの紹介を受ける。朝の渋滞を抜けるのに1時間半程掛かったが、後は田舎道をひた走る。遠くにアンナプルナ2峰が見える。4月10日に行われたこの国の総選挙の最終結果はまだ出ていないが、マオイスト党が第一党になる事は確実の様で、途中の村々で彼らの祝賀行列を何度も目にする。頭髪や顔に赤い着色をし、赤いシャツを纏いと、異様な雰囲気である。これから訪れるマルシャンディ川（以下M川）沿いの村々も略全てマオイストの勢力範囲だった。バスは予定のベシサハールから更に数km奥まで入り、クディの手前で下車。1時間ほど歩き15時半頃泊地ブルブレに着く。幕営後直ぐに烈しい夕立に見舞われた。高度は約800m。

16日 雨上がりの好天気のもと、M川左岸斜面をシャンジェまで15km程進む。一日かけて高度は200mしか稼げない。ネパール・トレックの常として、途中で出会う支沢を大きく回り

込んだり、ゴルジュの箇所にはきつい高巻きがあったりと障碍が多いことの他に、昼食に2時間前後も掛かってしまい、毎日もう一つか二つは先の村まで進めるのに、との思いを残す。薬師さんも「サーブはチャパティなど手軽なものを摂っているが、ポーター達は昼でも米のメシを炊くため時間がかかることおびたしい。どちらが旦那か」と何度もこぼしておられ、この点は今も変わらない。ポーターの歩みの遅いのは荷物のせいだけでなく、料金が日当制である事も一つの理由かもしれない。泊地の手前でこの日も激しい雷雨となり、吊橋の袂の宿に駆け込む。M川右岸には自動車の走れる道がここまで続いており、宿の手前には右岸に落ち込む滝の水力を利用した真新しい立派な発電所が稼働している。ジープでの走行なら、カトマンズからここシャンジェへは1日で入ることもできる。

17日 朝は快晴。M川を右岸沿いに上がる。一部難所を除き、午前中の行程の大部分は最近自動車通行用に開かれたもの。この地域はカリガンダキ筋を含め、荷駄はミュールというか騾馬にて運ばれており、エヴェレスト街道やランタン谷では殆どがゾウやヤクであったのとは好対照である。10時半にチャムジェ着。北海道からの老人Party6名に出会う。60歳後半から70歳という感じだが、内二人は我々の目指すピサン・ピークに登ってきた由。ここで昼食となり出発は1時半。今度は左岸を辿り最後はM川が高度差150m程を奔流となって流れ落ちる真横の九十九折の道を登る。上に着けば一転して川幅が広がり、タルの村に着く。この景色の変わり目の所に軍事基地が設けられている。村の入口には白く大きな門構えが在って、「Manang District, My Manang, My Shangrila」と記されている。このGateの上には五色旗と共にマオイスト旗が掲げられている。ここからマナン郡に入る。川沿いの村の最上流部にあるパラダイス・ホテルの庭に幕営。共産党の地方政治で名を挙げたインドのケララ州から来た若い男女が地元青年と熱心に議論していた。

18日 今朝も快晴の下気持よく進むが、9時半ごろダラパニの先のトンチェに入り、もう昼食の準備が始まる。マナスル方面に至るルートとなるドード・コーラとの合流点を見下ろす地点で昼寝する。自動車の通れる道をダンクェまで進みここから300m高度を上げる。今日の泊はテマン村。標高2,600m。高台のテント場からマナスル三山の夕景が美しい。気温は5℃まで下がり漸く山地に入った感じ。

19日 7時に出発。朝日に輝くアンナプルナⅡやその南側のラムジュン6,931mを眺めながら快適に進む。マナン郡の郡都であるチャーメに10時着。道幅は今朝からこの先マナンまでずっと広い。昼食。M川の側流に温泉が湧いており、少し冷たいが体を洗う。今日はブラタンの小屋泊まり。

20日 松の疎林越に雪の山を見ながら進む。2時間ほどでピサン村に差し掛かり小屋が現れる。平らな道で池もあり谷が広がりとても気分が良い。右側にピサン峰が望め、はるかその先にはチュールの群峰が美しい。10時にピサン村着。M川の左岸（対岸）の河岸段丘上に年季の入ったアッパー・ピサン村が見える。明日からの登高に備え、今日はここまで。高度は3km。

21日 荷物の一部をマナンで待機するポーターに預け、7時半出発。11時半、眺めの良いカル

力到着。幕営。丁度 1,000m上がる。高度を上げるに従い、北と西方の視界が広がる。ティリツォ・ヒマールを始めて目にする。春霞の向こうだが、写真でお馴染みの山容で、やあ・こんにちは、といった感じ。間近を小型機が飛んで行く。マナンの手前ウング村に飛行場があって、定期便は無い由だが、そこに降りる模様。テント・サイトからは空港が良く見える。M川を挟んで、アンナプルナⅡが巨大に目前に聳え立つ。脈拍と血中酸素値は今朝 60/90 だったがここでは 84/75 となり、冴つふらふらして頭が重い。ダイヤモンド 1 錠とミルク・ティーのがぶ飲みの影響で何度も小用に立つ。テントの中は 35℃で裸同様だが、夕方には一桁台まで下がり、下着を着込む。

22日 夜中に3度ソンに出たりしたので、顔の腫れは引いた由。気分も普通。今日も快晴。シェルパ2人が6時に先行する。我々は8時半出発、11時半に上のカルカに着き泊場とする。気分は昨日の行動後と同様で余り良くない。のどが痛く、声がかすれる。P. O. 値は 90/64。16時ごろシェルパ2人が帰る。ここは 4,800m位で、4km辺りより下はガスだが、上部は見える。夕陽がティリツォ峠方面に真赤に沈んでゆく。アンナプルナⅢ、Ⅱが赤く輝き、その間にマチャプチャレの上部が靉々とした幻想的な風景を楽しむ。

23日 0時に小用に出る。十六夜月に雪の斜面は月光に輝き山麓は陰り、その陰陽が素晴らしい。谷は霧の中。2時起床。3時過ぎに出発。歩行ペースが速く、離されないよう苦勞する。5時20分に 5,400mのキャンプ適地にて休憩。日の出に赤く映えるアンナプルナ連峰をバックに写真撮影。この辺から登路は雪氷となる。ピサン・ピーク上部は大きな雪のドーム状を呈しており、6時20分に、槍の肩の小屋に当たるような所で休憩。標高 5,700m位。このドームはスケールが大きく、高度 400m位はあってここから全景は見えない。日陰で寒さがきつく、震えが止まらなくなる。これに呼吸が反応し過呼吸状態に陥る。已む無く若い方のシェルパにエスコートされハイキャンプへ戻る。少し下がるとう過呼吸は収まり、30分もすると気分も平常へと回復する。まだ時間は早く穏やかな好天気なので余計に登頂チャンスを逃したことが悔やまれる。佐々木さんは私が去った後フルテンバと二人で傾斜のきつい雪面を登る。登頂の様子は彼によれば「ドイツ隊と別隊のフィックスロープがほとんどベタ張りであったが雪に埋まっており、掘り出しながら進む。逆層のスラブ部分はユマールで、3箇所 100m程あった。帰りはエイト環がほぼ使用できた。」というもの。3kmから6kmへの3kmの高度を3日でクリーアするには甲種合格の佐々木さんの体力が必要だった。12時ごろハイキャンプに二人が帰還したので、下のカルカにテントを移す。一昨日は我々だけだったのに10張りほどものテントが立ち並んでいて賑やかな事。

24日 8時半出発。快晴。ピサン村へは下らず、M川左岸上部を歩く。川から 500~1,000m程高い山腹を時には水平に、時には上下にと山麓沿いに進む。3,000~3,500m辺りから上部には茂る木は無く、畑地か放牧地なので何処までも見通せる。ピサンからマナンまでの本道は右岸の川沿いに行くが、左岸高地のこの道はアンナプルナ連峰に対峙して進み、その奥にはティリツォ・ヒマールが、右手にはチュール連峰が、そして真ん中には河谷の広がったM川流域が望める位置にあるので、トレッキング道としては最高である。あのティヒーが世界で一番美しい谷、と賞賛したのはこの辺りを踏まえてだろう。16時にマナン着。この街道で一番名のある村で、チベット系なのだが擦れっ枯らしの人間が多く要注意といわれ、薬師隊は脇目も振らずに通ら過ぎた所である。アンカミもこれを追認した。いかにも古い村であるが、ホテル数も多く外人向けの雑貨屋

や登山用品屋、土産物屋、ビデオの映画館まで立ち並んでいる。明日はここで始めての休日とする。日本に電話し、シャワーを浴びて、洗濯をと忙しい。

25日 居眠りと読書に疲れ午後散歩に出かける。この村からは、ガンガプルナのアイスフォールが指呼の間に望める。人を寄せ付けない急峻さだ。村から2 kmほど上流で西からのカンサール・コーラと北からのコネ・コーラの合流点に達する。この合流点から下流がマルシャンディという川名となる。さて、北西から南東に4 kmほどの細長い形のティリツォ湖は南東部分が氷河の残した巨大なモレーンで堰き止められて出来たものと思われるが、そのモレーンの一番上にティリツォ峠があって、これがカンサール・コーラの源頭である。高度差 900mを流れ落ちるこのコーラ上流部の白い流れはマナン村からも視認できる。標高 5 kmの峠で、その高さでは周りの山々には雪はないが、湖と並行して走るグランドバリエールからの雪崩のためか、かなりの積雪が見られる。村でティリツォ越えの情報を集めさせたが、明確なものはない。それより足元の我々のポータ達に、雪道を2日も歩くのは絶対ごめんだと言いだしている、という。それならそれでトルン峠越えの手もあるので、本件は本番の山チュール・ウエストが終わってから対応することとする。

26日 テンギ村まで20～30分登り、あとは水平移動に移り北上する。2時間ほどで、グンサン村のホテルを通過。アンナプルナⅢ、ガンガプルナの展望台である。14時ごろ今日の泊地ラター着。その少し手前で右手、即ち東側にチュール・ウエストの山頂部を見る。2 kmの高度差があり、かなり高く見える。

27日 東側から入り込む谷筋を登り、2時間半で上のカルカに着きここにBCを設営する。広く、平らで清流があり、赤茶けた山肌と黒い岩峰に囲まれ、雪の主稜の奥には本峰が白い輝きを見せる。これに草が生え揃えば桃源郷だ。高度 4,700mでモリモトBCを思わせる。このBC地点ではじめてチュール・ウエスト峰とその登路となる尾根筋が明らかとなる。明日からの登高ルートを何度も検証する。カモシカが岩場に点在している。

28日 6時にシェルパ・ポーター3名が上部ルート工作に向かう。我々も8時に出発。今日は高度馴化を兼ねた偵察行である。赤茶けた砂と小石の急坂を1時間ほど登り主尾根のコルに着く。高度 4,900m。今までに見慣れない北方の山々を前にして、地図を手に山座同定を試みる。標高 5,400mのトルンパス（別名ネシャン峠）は南北にカトゥンカン、ヤカワカンの6,400m峰を擁する、ゆったりとした雄大な鞍部で、雪はついていない。コルから高度差 400m程の岩峰を登る。BCからはかなり手強そうに見えたが、緩傾斜の岩場で、時々両手を使う程度。途中で3級位の岩場に出会う。佐々木さんは旨く抜けたが、小生はルート工作隊のザイルを使う。まだ11時で、岩峰頂上まであと僅かだったが、今日はこの程度としてBCに戻る。先発3名は14時にテント帰着。約200mのフィクス・ロープを張ってきた由。18時のPO値は小生 85/70、S 75/70。

29日 岩峰頂上に設営するハイ・キャンプに向けて出発。陣容はシェルパ2名とキッチン・ボーイ一人でテントは二張り。これにポーターが2名付き、テント設営後BCに帰る。昨日ザイルを使った場所から上部に白いフィクス・ロープが岩峰頂上付近まで張られているが、今日のような好天気であれば不要である。13時に泊地に着き、16時まで仮眠する。テントは始めて

雪の上である。頭が少し痛い。薬は飲まない。大量に水分補給を行う。S 85/55、Y 100/47

30日 2時半出発。快晴無風。最初一時間ほどは岩の出ているリッジ状のルートを進むがその後雪の緩傾斜に変わる。雪面にはクレヴァスがあるのでアンザイレンする。6時ごろまでは遅れると3人を待たすので何とか付いて行くが、地形が登りに転じ、クレヴァスの心配がなくなったので、ザイルを解きマイ・ペース歩行に変える。呼吸は早い、日差しが強く暑いほどなので過呼吸の心配は無い。何歩か進み、何秒か休みを繰り返す。頂上手前のプラトーまでは急斜面で、先の3人の動きが良く見える。まだ雪は堅く、30cmほど潜る程度。若いアングラウはやはり強く、9:45に視界から消える。それから5分遅れで二人が続く。小生は更に30分ほど後となる。ピサン・ピークを敗退したので「ここは何としても」という気持ちで登ったようなもの。プラトーからはあと15~20m程の三角形の雪の頂上があるのだが、大きな雪の割れ目に阻まれ前進できない。頂上は神様の場所として残し、下山にかかる。ハイ・キャンプの手前でここに残ったキッチン・ボーイのテンバの出迎えを受け、エスコートされ15時ごろ帰還する。いつもは午後から風が強まるのだが、この日は最後まで無風状態で恵まれた登頂日だった。通常の夕食を摂ったが疲労困憊の身では受け付けず、全てを戻す。スープと胃腸薬、タンパクの栄養剤、それに甘いミルクコーヒーを何杯も飲む。この夜は小用には出なくて済んだ。頭痛も無く普通の眠りがもてた。S 85/58、Y 105/58

5月1日 7時半に出発し、10時前にBCに帰着。日差しが強いので、ダイニング・テントに入り椅子とテーブルで寛ぐ。午後アンカミと今後の予定を協議する。ポーター3名は雪上歩行にも付いてこれることとなりこれに強力なキッチン・ボーイ3名、コックとシェルパ各1名の陣容で予定通りティリツォ経由のルートを取る。隊荷を軽くするためにダイニングとトイレ用のテントや椅子、テーブルも携行しない。登攀用具や高所用の個人装備は、ここから来た道をカトマンズまで帰るサダーと6名のポーターに委ね身軽になる。

2日 8時発。1時間で下のバグティに降り立つ。先日の泊地だった所。日本語を少し話す亭主が登頂を祝ってくれる。ここから5kmほど北上すれば峠登りの基点となるトルンペディ村に達するし、そちらの道にも魅力を感じるが、身は一つしかないのだから来た道を少し戻る。サダーたちもこの道をマナンに下ると思っていたが、逆にトルン越えとなったようだ。グンサン村の手前でコネ・コーラを渡り昼食。食後は一気に400m登りカンサル・コーラの上部高巻道に出る。振り返れば、カンサル・コーラとM川の大きな河谷の広がりの中をマナン村ほかの来し方が、その上部にはピサン峰やチュール東峰が霞んで見える。谷底にカンサル村を見、更に行くと上部カンサル村が見下ろせ、道沿いには綺麗に整備されたカルカが広がる。2時間ほど進み16時にバグティに着く。今日は4,800mのBCから3,800mの主谷の底まで下り、再度400m上り次に高巻道を上下に進みと、高低・距離・時間共に相当のアルバイトを強いられた。夕食時はあたり一面雪化粧。

3日 広かったカンサル・コーラも上流となって河谷が狭まるに従い高巻道の横切る斜面は急峻となる。高度差1,000m程の崩壊地の真ん中を何度も通過するが、砂礫がうなりを立てて落ちてくる場合もある。後ろのシェルパが警告してくれるが、これだけは避けようがなく恐ろしい。

3時間で今日の泊地に到着。グレッシャー・ドームから逆落ちる氷河の正面に当たる所。この山域最奥のホテルで、満員となる。高度は4,165m。P O値は70/80。

4日 曇り時々晴、午後は雪 7時出発。急坂を2時間半ほど進むと緩やかな登りに変わるが、同時に雪道となる。行けども行けども湖は現れない。漸く11時に4,900mの湖岸に達する。湖面は凍結していて白く、雪山に囲まれた世界最高所の湖は、雪混じりの風の中で一入神秘的に見えた。西岸はテラスから湖面までは断崖となるが、グランド・バリエールの大落ち込みとの間に広がるこのテラスは湖の北西端まで続いておりこれを辿る事も出来そう。凍結した湖面を行くのが一番近道なのだが、我々は右手（東側）を行く。高度5,000mのこの辺りは全て雪道である。ここより高度が上のトルン峠に雪がないことを思うと、この辺は雪の降りやすい地形の様で、南からの風はここで残りの湿気を落とし、乾燥してチベットに向かうのだろう。明日は東岸に連なる山の東側を進む事になるが、今日は登りが始まる手前で幕営する。夜半まで降雪が続く。

5日 4時ごろには雪は止んだが、ガスが懸かり視界は今一だ。上空は晴れており行動には支障が無い。今日は湖を通過してメソカンテ峠を越える本トレックの最後の山場であり、下山開始日でもある。朝方まで雪だっただけに、この日の好天に無上の喜びを感じる。新雪を踏んで出発。北東側の湖岸にせまる山塊の湖から見て裏側の登路をたどる。MESOKANTO PASS と書かれた立派な道標が現れる。2時間ほどでタルチョーが旗めく小丘に着く。ここからは雪原となり2kmほど進む。12時ごろ小高い頂に出る。北方から湖に入る谷が大きく切り込んで行く手を遮る。地図上の道は谷沿いに一旦湖岸まで降り一つ南からの別の谷筋を遡上しメソカンテ峠に至るものだが、実際の登路は最初の谷を途中まで下り、次に山腹を豪快にトラヴァースして峠に達するものであった。この辺りの実景は10万分の1の地形図ではとても読めず、歩くことによって新たなものに出会う面白さを味わった。トラヴァース途中からは昨日と逆方向から湖を眺めたが、ティリツォ・ヒマールは頂上も登攀ルートの北稜もガスが懸かりよく見えない。5,099mの峠から岩交じりの雪渓を北西側を下る。雪渓は一部氷化しており、ガスで下は見通せない。大勢が降りるので落石が頻発する嫌なところである。1時間半ほどで雪渓が終わり、ここから谷を離れてヤク道を伝い左側の尾根に出る。ここまで下ると雲も切れて辺りが全て見えてくる。尾根の下方にカルカと軍のケサン・キャンプが、その先にカリ・ガンダキの河谷が霞む。目を上げれば、ダウラギリ・ツクチェ・ダンパスと続く雄大な連山が姿を顕しているではないか。やれやれこれで明日はジョムソンに着けるわい、と緊張感を解く。尾根を駆け下り3,600mほどの所に水場を見つけ、西日が燦々と差す中で薄緑色の草地にテントを張る。南西面にはニルギリ諸峰が聳え立つ。夜は満天の星空と下の村の電気の明かりを楽しむ。

6日 快晴 夜明け前に起きだしてカメラを手に日出を待ち構える。山々は真赤には染まらなかったが、シャッターを押しまくる。下山路はケサン・キャンプを横切る形で付いている。ここはドライラマのインド亡命と共にチベットを脱出したカンパ兵が拠点とした所で、以前外国人はこの尾根の通行を厳しく制限されていた由。更に下りランボギーニ・コーラの広い川原に降り立つ。カリ・ガンダキとの合流点の手前で右岸の河岸を登りティニ村に達する。灌漑水路が村中を流れる旧村で、青々とした大麦畑は雪山の疲れを癒してくれる。川向こうにホテルが並ぶジョムソン村があるが、空港の開設は1976年なので、それまではこちらが本村だったという。麦穂の揺れ

る段々畑を下り、吊橋を渡ってジョムソンに入る。山向こうで別れたサーダーとポーターの迎えを受ける。彼らの紹介で、伴・福山隊のシェルパに出会う。2人はたった今軍のヘリに便乗してカトマンズに向かった、と。

ビールで乾杯の後、アンカミと今後の予定を立てる。連日好天で予備日を使わなかったので、数日の余裕がある。近年この地域では乗合のジープ便が意外と発達しており、ムクチナート向けのみならず下流のガーサまでOKの由。そこで先ずトレッキングの編成は計画通りここで終了とし、一旦解散の後、アンカミとポーター一人を伴い4名でバッチェ泊の旅を組む。明日はクチナートを往復する。次の日は車でガーサまで下り、タトパニまで歩く。3日目はゴラパニまで上り、4日目はピレタンティまで下り、車でポカラ入りする、というもの。ジョムソン/ポカラ間の航空券はキャンセルし、浮いた費用を車代に充てる。日程変更をEメールでテンディに伝える。

7日 6時にカトマンズに帰るシェルパ、キッチン・ボーイ、ポーターたちを見送り8時ごろ出発。ジョムソンはカリ・ガンダキ右岸にある高度500mを越える有名な巨大褶曲岩塊と左岸の河岸段丘とに挟まれて川幅が非常に狭くなった位置に出来た村で、これが砂防ダムのような作用をし、これより上流は川幅が1km以上もある広大な川原が広がっている。

川原の尽きる所から乾燥し赤みがかかった山地がうねりながら奥へ奥へとチベット高原に向かって展開して行く。途中で出会うムスタンへの入口のカグベニ村やジャルコット村は、くっきりとした緑の段々畑に囲まれ、周りの乾燥地と対照を見せている。約1時間半で高度3,810mのムクチナートに到着する。ここでは大麦は10cm位にしか育っていない。

この地はラマ教だけでなくヒンズー教の聖地として有名で、マナン以北のネパールでは余り見かけないヒンズー教徒の姿が目立つ。なんだか急にカトマンズの町に入ったような雰囲気戸惑う。高台にある寺院からはダウラギリとツクチェが思ったよりも近くにはっきり眺められる。この山々の存在はここに聖地が置かれた一つの理由だろう。ラマ教寺院で魔法の火を拝んだ後、佐々木さんの案内で、高津林さんの友人二人の墓に参る。日当たりの良いホテル屋上のテラスで昼食。ビールを2本空け、暫し午睡。帰路は強風となり、砂塵が舞う。まだまだ多い歩行者達の難渋を尻目に往復2日の行程を3時間で通りぬける。

8日 6時過ぎにホテル前から乗合ジープで出発。マルファ、ツクチェといったタコーラの主村をたちまち通り過ぎカトパニで一時停車。この辺りのカリ川は河原が広がり松林が美しい。流域にある村々は主として南北の交易と宿場の地として存在し、人々は長年それによって生計を立ててきた訳だが、車道の開通により今後どうなってゆく事だろう。今はまだ車に人しか乗せていないが、数年後にはポカラまで車が走る事は確実で、その時この驃馬追い達は失業してゆくのだろうか。トレッカーを増やし、バッチェの需要を高めることでバランスが取れば良いのだが。ガーサで全員下車し歩き始めると何故かホットする。ここから下流を暫く行くと、カリ・ガンダキは川幅数m程の峡谷状となり、以前は黒部渓谷を歩く様と言われた所だが、ここにも立派な道が繋がっている。検査前だそうで車は通していない。ダナにて昼食。ミスティ・コーラとの合流点に近く、ニルギル登路となる尾根がくっきりと立ち上がっている。タトパニの手前で雨となる。高度1,100mまで下がり、亜熱帯の風景に変る。昨日はチベットの入口に居たとはとても信じられない。楽しみにしていた温泉は8m x 10m位、深さは1mの水槽で、洗い場は横に付いており、本格的

なもの。カリの河原はすぐ側で、山々を見上げながら温めの湯を楽しむ。

9日 一般通商路はここからベニまで4～5時間下り、ベニから車となるが、我々は2,875mのゴラパニまでの山道を登る。キャラバンだと途中のシーカ村までだが、小屋泊の身軽さで一日1,700mの高度を稼ぐ。道中の1,000mから3,000m位の傾斜地はネパールの典型的な段々畑が展開される場所で、どこか懐かしく閑静な山村を時には学童と共にたどって行く。今日・明日はマガル族の居住地で、グルカ兵の故郷でもあるようだ。橋や水飲み場などの公共施設に彼らの寄贈を記すパネルが多く見られる。高度2,500m辺りからまだ花を付けた大きな石楠花の木が出てくる。夕立に急ぎ立てられて最後の急坂を登り、峠のバッチェに駆け込む。アンカミに依れば20年ほど前はたった2軒の茶店しかなかったそうだが今では50件ほどのホテルが傾斜地に軒を並べて賑わっている。

10日 山での最終日の朝は4時に起床し、暗い中を300mほど高いプーン・ヒルまで登る。途中で明るくなるが乳色のベールが取れない。毎日あれだけ快晴だったのに、ティリット湖でどうか今朝だとかの肝心の日の朝は何故か冴えない。それでも暖かいミルク・ティーを飲んで時間をつぶす内に少しはガスが上がり、カンチェンジュンガが色付くのが見えてくる。カンチェはこちらからは山容が左右に広がり、北から見るとは別の山のような。アンナプルナ方面は逆光となり、その右隣のマチャプチャレの右肩から朝日が顔を出す。ガスと光線が縞模様を作り出す。何処からこんなに集まったのかと思うほどの人がカメラを手にして談笑している。ホテルに帰り朝食を摂り、7時ごろ出発する。今日はポカラへと思うと足取りも軽い。ランタン谷に似た森林帯を過ぎると、木々がなくなり、果てしなく続く広大な傾斜地を見下ろす高台に出て、一望千里を楽しむ。ここから谷底の橋まで一気に500mを下る。殆どが村中であって、石の階段が続いている。傾斜度と高度差から見て、一般トレック道としてはこれまでで一番きつく音をあげる。然しながら、日差しはまばゆく、この国特有の緑の段々畑が打ち続く様子や、遙か下流の霞に消える辺りに目を遣りながら下ってゆくのも悪くはない。ヒレ村の眺めの良いバッチェで昼食。15時ごろピレタンティに降立つ。話の通り、ちゃんとジープが待機しており、折からの夕立に飲むものも飲まず乗車する。丁度同乗者も見つかり、強雨の中を2時間走り暗くなる前にポカラに着く。

終わってみて振り返れば、山登りに今少し時間を掛けたほうが良かったとも言える。特にピサンの場合、登りにもう1日掛けていたら悠悠と楽しめたのに、との思いが残る。しかしその後こんなに好天に恵まれるとは全く予想外だったし、奥地でのジープの利用も始まってから間が無く日本を出るまでは知らなかった事なので、今回は二つの山登りを経験し、ティリット湖を見た上でアンナプルナー一周まで出来た事を喜んでいる。

トレック代理店のICELAND社は今Spring Seasonは20組ほどのトレック・パーティーを出したようで、大賑わい。結果としてわが隊にアテがわかれたサーターとポーターが今一であった。2nd シェルバは登攀技術・体力・人柄も上等。日本語のうまいコックのアンカミが実質的な取り仕切り役であった。食事の方も昨秋よりもっと口に合うものが出た。彼の配下のキッチン・ボーイたちは体力、躰ともに申し分無く、結構な働き振りであった。おかげで楽しい一ヶ月を過ごす事が出来た。

ヒマラヤ高度順化トレーニング

伴 明

目的：

ヒマラヤ 7,000m以上の高峰登山を「高所登山」と呼ぶことになっているらしい。で、今回は高所登山に近い将来行なう為の「高度順化」能力の獲得もしくはできるだけ高度順化度を高めておきたいという目的、それも今年の連休期間ほぼ 10-12 日間の期間中に 6,000m をクリアするといういささか無謀ともいうべき実験を試みた。6,000mを越えるピークならどこでもよかったのだが、エヴェレスト街道筋は昨秋行ったところだし、アンアプルナ内院からのテントピークも短期間でいけそうだが高さが 5,663mと低い、ということでダウラギリ 1 峰ベースキャンプへの途中にあるダンプスピーク 6,012mの頂上あたりまで行ってみることにした。

メンバー：伴 明、福山 昇二

費用：

* ICELAND TREKKING & EXPEDITION LTD なる現地エージェントを使い、10 日間の食料、テント、シェルパ 1 人、キッチンボーイ他ポーター数人、トレッキング許可証（ピーク登山許可はとらず）、カトマンズ／ポカラ／ジョムソム往復エアーチケットの手配など、しめて USD1,500／人を契約し、出発前に送金。

* 関空／バンコック／カトマンズ往復エアーチケットが連休期間の 3 割高で 15 万円／人プラス 13 日間の旅行傷害保険 8,000 円／人。

* その他、終了後のシェルパ／ポーターへのチップ、往ポカラ 1 泊復カトマンズ 1 泊のホテル代、復ジョムソムからの飛行機が天候不順により飛ばずヘリコプターでカトマンズまで帰着分 USD300／人（内 USD100／人リファンドあった）。

* 以上総費用は約 34-35 万円／人。

結果：

ジョムソムから歩き 2 日目、マルファ（2,700m）からヤク・カルカ（4,200m）への登り 1,500mをゆっくり登ったつもりだったが、これが伴の順化速度オーバーを引き起こしたのか 4 日目の更に上部への登り 5,000m弱の地点でダウン、肺水腫の初期症状と思うが、せきひどく泡状のピンク色の痰が出始め上への登りが不能な状態に陥った。福山は 3 日目に下痢、嘔吐するも下痢止め／ダイアモックスの服用で症状回復した。5 日目やむなくマルファに向けて下山開始、伴はポーターに背負われて下山したがマルファ近くまで下山すると一人で歩けるまでに急回復した。多分 3 日ほどマルファで休養すればまた登れたかも。いずれにせよ、6,000mあたりに登るにも短期間で高度順化はできないこと身に沁みて実感した。一日高度差 500mぐらいの登り、しかも鋸歯行動をとりながら時間をかけて順化してゆくこと、これが高所登山の鉄則と思われる。日本ではトレーニングとしての富士登山の回数を増やしたい。

記録：(福山・記)

メンバー：伴明、福山昇二 期 間：2008年4月27日～5月7日

4月27日 関空～バンコク～カトマンズ～ポカラ (泊)

4月28日 ポカラ～(空路)～ジョムソム～(徒歩)～マルファ (泊)

ジョムソム空港でシェルパのホルバの出迎えを受け、マルファ村まで徒歩で行く(約1時間10分)。マルファのホテルの庭にテントを張り宿泊。

4月29日 宿舎発 7:10～11:25 アルバリ 11:35～ヤク・カルカⅠ (4,200m)

マルファの村から砂地の山道を登り高度を上げていき、台地となっているくアルバリに着く。ここは水場がないとのことで、更に上部のヤク・カルカにテントを設営。シェルパ1名、キッチン1名、ポーター8名。(各自、ダイアモックス服用)

4月30日 ヤク・カルカⅠ (4,200m)～高度順応～ヤク・カルカⅠ (4,200m)

福山は夜半よりムカつき、明け方に下痢、嘔吐の高山病の症状となる(前日の夕食はおいしく食べた。喫煙も可能であった)。伴は特に顕著な高山病の症状はないが、やや歩行が遅い程度。今日は高度順化日とし、高度順化を図る(各自、ダイアモックス服用、福山、下痢止め服用)。ニルギリの西面とチリチョピークが美しい。

5月1日 ヤク・カルカⅠ (4,200m) 7:15～9:50 ヤク・カルカⅡ (4,600m)～11:20 引返し地点 (5,000m)～12:10 ヤク・カルカ (4,600m)

今日はカロパニ (4,800m) のベースキャンプまでの予定で出発。福山は食欲はないが復調し、下痢も収まりかけた。伴は歩行スピードが遅く、シェルパが予定を変更し、ヤク・カルカⅡで宿泊するとのことで、福山はダンプス・ピークが見えるところまで行き、引き返す。(各自、ダイアモックス服用、福山、下痢止め服用)

5月2日 ヤク・カルカⅡ (4,600m) 7:15～14:00 マルファ村

伴の咳が激しく、自立歩行が困難な状態となる。痰の中に血液らしきものが見られる。ポーター3人に交代で背負われて下山。一路、高度を下げるため、マルファ村まで直行する。マルファの宿泊所で宿泊。登山隊は解散となる。

5月3日 マルファ村 7:40～10:15 ジョムソム

伴はゆっくりながら歩けるまでに回復。ジョムソム村に宿泊。

5月4日 ジョムソム 7:40～カグベニ～11:10 ムクチナート

登山を中止し、シェルパのホルバと共に、聖地ムクチナートをジープに乗車して、訪れることとする。途中、カグベニの寺院を見学。ムクチナートからは遥かにダウラギリが見えた。

5月5日 ムクチナート 8:45～(ジープに乗車)～10:00 ジョムソム

5月6日 ジョムソム～カトマンズ (KTM) (泊)

ジョムソムからポカラのフライトが今日は中止となり、宿の主人の口利きで、ポカラを経由しカトマンズまでヘリコプターに乗ることとなった(300ドル/1人)。

5月7日 KTM～バンコク～関空

午前中、スワヤナート寺院見学。午後便でKTMを立ち、8日朝、関空に到着。 以上

総会が開催されました！

2008年4月19日

於：大阪弥生会館

今年も30名の出席の下、総会が開催されました。川勝会長の挨拶に始まり、伴副会長の総括報告があり、島川幹事の昨年度活動報告および今年度活動予定や、上田幹事の会計報告等がなされました。幹事役員の改選も行われ、長年ヒュッテ雪線の運営幹事を務めていただいた久保田氏が退任されました（本年度役員については別紙を参照下さい）。

また、会則の改正では「満80歳以上（当該年度の4月1日現在）の会員の会費免除」が決められました。

今年の記念講演は、上田 豊氏（京都大学学士山岳会会長）に「温暖化と世界の氷河」と題してお話していただきました。顕著な氷河末端の後退と素晴らしいヒマラヤの山々の姿が沢山の航空写真により紹介され、「第3の極地」を身近に実感することができました。

総括報告

伴 明

佐藤幹事長が腎臓の不調にて入院加療中につき、伴がかわりに総括ご報告いたします。個々の詳細につきましては各担当幹事から報告してもらいます。

1. まず総務としては、福山幹事により隔月毎の幹事会が開催され、毎回ほぼ10人の幹事が集まり、山岳会として取り上げるべき案件の数々を話し合っていました。団塊の世代の退職時期に当たったこともあり、60才をこえる方々の集まりぶりがよかったといえますが、相対的に若い方々の参加が少なかったのはさびしい想いもいたします。本日の総会の段取りももちろん福山幹事の手配によるもので、毎年かかる立派な総会をひらくことができることを幹事に感謝したいと思います。

2. 次いで企画運営ですが、山田幹事が精力的に行ってくれました。昨年度のイベントのなかでは、会員有志9名によるアイランドピークとランタントレッキングが大きな登山活動であったと思います。

この場をかりて、私が昨年の総会で計画した会員有志による「8000m峰登山計画」について触れておきたいと思います。

昨年来ほぼ1年間にわたってダウラギリ1峰またはガッシャーブルム2峰を対象として、佐々木さんを中心にルート、食料、装備、物流、シェルパ、およびすべての経費の検討を行ない、個々にトレーニングもつみかさねてきたのですが、今ここにいたって、当初私が想定していたメンバー8名のうち半数の4名が諸般の事情により参加できない見通しとなりました。時期は今秋の予定だったので登山許可申請は3ヶ月前ゆえこの5月中旬で間に合うのですが、メンバー4名のみという状況は変わりそうもありません。したがっていったん本計画は白紙にもどすことにいたします。今後は、引き続き会員有志によるヒマ

ラヤでの高度順化体験登山を繰り返して行ない、メンバーの数が揃うのを待ちたいと思います。けっして諦めてはおりません。

3. 次に山岳会会報担当についてですが、44号までの佐々木さん（記事の依頼・集約）と八木さん（編集・発行）の2人分担体制から、45号以降は奥田幹事を主に会報の編集委員を山田さん上田さん佐々木さん佐藤さんの5人体制で、会報の記事依頼／編集／発行のすべてを行なってもらうことにしました。次回の会報（46号）で載せる予定の第1次リルン隊・森本書簡の対応もやってもらいます。

4. 次にIT担当幹事を設け、いままで大変努力していただいた藤本さんへの感謝をするとともに、ホームページ／メーリングラン／メールアドレスの維持管理を兵頭幹事にやってもらうことになりました。

5. 次に山岳部指導育成についてですが、現在の山岳会にとって最大の任務は現役部員の数を増やし、育成することにあります。ただ去年は残念ながら松本君1名の入部に終わりました。本当に何とかして部員の数を増やしたい、今年も智恵をしばって入部者の勧誘に努めたいとおもいます。

6. 次にヒュッテ雪線運営について、いままで10年間にわたり維持管理責任者を務めていただいた久保田さんに多大の感謝を申し上げます。今後は中嶋／大島／兵頭幹事が雪線運営幹事としてヒュッテの維持管理に当たります。

7. 最後に去年は上田会計幹事に「憎まれ役」として会費徴収に尽力願いました。今年も引き続きよろしくお願ひしたいと思います。

以上

平成20年度総会案内の通信欄より

○当分、阿蘇くじゅう高原ユースホステル（阿南誠志方、TEL0967-44-0157）で10日間泊まり、4日間の休み、2週間サイクルで“ユースのおばちゃん”やっています。九重においでの際はぜひお立ち寄りください。（昭和55年生科卒、西沢裕子）

○4月13日～5月13日にてアンナプルナ方面のピサンピークとチュルウエストの2峰に山田君と登りに行き、チリチョ湖を過り、ジョムソンに帰ります。（昭40年卒、佐々木）

○今年は出席したいと思っていましたが、ネパールの私の宿舎であったホテルのマダムが横浜に来ます。その世話を週末にしなければならぬので、欠席します。

（昭33年卒、北濃）

○残念ながら体調をくずして居りますので失礼させていただきます。（昭28年卒、信濃）

○昨年秋はアイランド・ピーク山行に同行させて頂きありがとうございました。

（賛助会員 柴原）

○1年遅れ（満年齢）で喜寿を祝うのも変ですが、実母の白寿を1ヶ月遅らせ合同で4月19日にセットしました次第です。（昭30年卒、高木）

○夫婦して入退院リレーです。皆様のご活躍を祈ります。（昭39年卒、常慶）

○その日は外せない仕事があり、いきなり休んですみません。年会費はちゃんと支払います。（平成20年卒、藤井陽介）

○皆様、現役の時のようにあちこち登られて、羨ましいかぎりです。例によってお得意様とのお付き合いが入っておりますので欠席させていただきます。(昭39年卒、岡野幸義)

○この4月から、東京で保健師としてはたらくこととなりました。初めての社会人、東京での1人暮らしと初めてづくしですが、また新たな生活が始まると思うと楽しみです。山にも登っていければと思っています。(平20年卒、近藤由佳)

○1月に義父が亡くなり、当日は納骨で欠席します。義父は明治大学OBで、現役の時、明神東稜の積雪期初登をしたと言っていました。(昭56年卒、小倉裕史)

○昨年までは、ブラジル、モンゴルとほとんど日本に居ませんでした。今年度からはそんなに海外に行かなくてもよくなって来ていますが、管理業務的なものが多い年齢になってなかなか自由のきかない身になってしまいました。(平4年卒、下田勝久)

○昨年は山荘へのご案内を頂き乍ら参加できず残念でした。実は小生白内障が悪化し、当時は視力が0の状態、角膜内皮障害があり、通常方法の手術は不可能で医者からは角膜移植しか方法はないと言われました。幸い内藤毅君から東京女子医大の眼科をされ、診察の結果、昔乍らの手作業による手術なら再生可能といわれ、7月上旬に手術を受け、10日間入院しました。(中略)その後、視力が0.9~1.0となり、毎日通院しています。内藤君の二女の方が東京女子医大の眼科の先生で大変助かり感謝しています。眼以外は歳なりに元気で、ジムに通い、体力維持を計っています。(昭27年卒、谷口清士)

○76才を越え、何とか元気で過ごしていますが、毎土曜日に用が入り、そちらを欠席できませんので、楽しい総会に出席できず残念です。(賛助会員、稲垣喜久雄)

○4月はこの土日しか山に行くチャンスがありませんので、欠席させていただきます。申し訳ありません。(昭56年卒、田中博之)

○下手なゴルフと少しはましな俳句で元気に過ごしています。近郊のお寺まいりをして居ります。ヒマラヤ遠征は如何になりましたか。少しですがカンパさせて頂きたいと思っています。(昭33年卒、東野美智代)

○高校同窓会東京在住の人達と「山歩きの会」を作り、世話役をしています。我々のこの時代の同窓は旧天王寺中学、旧夕陽丘高女の二つから成り、東京では合同で行っております。そのため、行事が多いです。(昭33年卒、堺)

○本年1月5~7日上高地へ行って来ました。雪が多く、アイゼンとスノーシュー持参しましたが、アイゼンは不要でした。夏は鈴なりのかっぱ橋も人影なく静寂と白銀の世界でした。ちょっぴり冬山気分を味わって来ました。(昭34年卒、中西雅一)

○申し訳ありませんが、土曜日仕事のため、参加ができません。(平20年卒、澤)

○賛助会員として入会させていただきありがとうございます。(賛助会員、鷺田ゆり子)

○今年は大山北壁は2本完登しました。山スキーはよくいってます。来冬はテレマークを習得しようと思っています。2010年には岡山県山岳連盟隊で、チョモランマの予定です。(昭54年卒、武部秀夫)

以上

大阪市立大學山岳会 会計報告(2007年度)

期間 2007/3/1～2008/2/29 会計担当 上田忠士 08.4.19

収入の部

収入内容	金額	備考
前年度繰越金	914,846	
会費(正会員)	545,000	総会時 175000円、その後 370000円
会費(賛助会員)	42,000	6人
臨時会費	220,000	総会4/21開催。30人×7000円 2人×5000円
会費合計	807,000	
合 計	1,721,846	

支出の部

支出内容	金額	備考
総会費	187,730	4/21開催
講演お礼	60,000	伊藤氏
現役活動支援	30,000	山田担当: 装備など購入支援
山岳会会報発行費	79,626	八木、山田担当: 2回発行
HP関連パーツ購入	69,000	藤本
山岳会装備購入	93,767	テント購入、テント修理 佐々木
外部団体会費他	27,000	JAC, 府岳連会費
慶弔費	39,238	三島氏、池永夫人供花、鷲田弔電
事務費	78,697	総会案内など 福山、上田
次年度繰越金	1,056,788	=2/28現在預金残高、郵貯銀行当会口座
合 計	1,721,846	

年度内収入	807,000	
年度内支出	665,058	
収 支 計	141,942	増 分

上記報告内容は正しいものであることを認めます。

監査 奥田 寛

大阪市立大學山岳会 ヒュッテ雪線会計報告書 2007年度

(2007年3月1日～2008年2月29日)

08.4.19

会計: 上田忠士

収入の部	金額	備考	支出の部	金額	備考
前年度繰り越し	1,786,779		電気料金	56,886	前年比 122%
利用料	174,800	前年比 49%	ガス料金	30,026	前年比 102%
利息	2,581		水道料金	37,800	前年比 100%
電話代回収	1,010		電話料金	20,662	
会費(長谷川)	5,000		固定資産税	60,300	
			地代	51,919	
年度収入 計	183,391		汲み取り代	8,990	2回
			備品購入	34,248	前年 2517円
			改装費	73,920	
			住民税	4,000	
			通信費	4,120	
			年度支出 計	382,871	
			繰り越し金	1,587,299	
合 計	1,970,170		合 計	1,970,170	

収入 183,391
支出 382,871
差引 -199,480

預金残高 2月28日現在
八十二銀行 1,122,659
ゆうちょ銀行 464,640
合 計 1,587,299

上記会計報告は正しいものと認めます。

監査 奥田 寛

「森本レター・ファイル」が山岳会に移管されます

このたび、廣谷氏からのお申し出を受け、これまで氏の手元で保管されていた「森本レター・ファイル」を山岳会が引き継ぎ、「ヒュッテ雪線」にて保管することになりました。移管にあたり、その成り立ちや概要を以下の通り紹介させていただきます。

* 「森本レター・ファイル」とは

以下、会報32号—2001.7発行—より再録

くヒマラヤ小史を駆け抜けていった人・森本嘉一氏

廣谷光一郎>

第二次世界大戦後、日本の登山界は日本山岳会のマナスル（1953—57）を皮切りに京大学士山岳会のチョゴリザ（1958）、北大山岳会のチャムラン（1958）などがいずれも登頂され、1959年には日本山岳会がヒマルチュリに試登した。

明けて1960年慶応大山岳会はヒマルチュリ、京大学士山岳会はノシャック、女性隊はディオチバ、同志社大山岳会はアピなど、未踏峰への挑戦がなされ、日本のヒマラヤ登山史の夜明けとも言われる時代に入っていた。

他方、大阪市立大学山岳会においても、他の大学山岳会と同様にヒマラヤへの夢の実現化のための努力が払われていた。

1949年、山岳部員であった池永薫爾氏を中心となり、ヒマラヤ研究会が発足した。その運営を最も支持し応援した人が森本氏であった。

1960年2月、大阪市立大学山岳会の臨時総会においてヒマラヤ遠征委員会が結成され、具体的な計画については森本氏に任されたのであった。このような経緯と前後して森本氏の活動はフル回転していったのである。

今後、公表する森本レター・ファイルは東京在住の廣谷との登山隊結成に至るまでのレターである。約一年間にわたる交換レターには森本氏のヒマラヤにかける情熱、豊富な情報収集、リーダーシップ、そして人としての悩み、心の葛藤などがつぶさに感じられるのである。（以下 略）

* 「森本レター・ファイル」を読んで

～駆け抜けてゆかれた人

清原鉄也

シベリア抑留中「オレは山屋なのだ」という自負が氏の背骨になっていたと思う。故国へ生きて帰れさえすれば、いずれ山を慕うことも再開できると、日々自らを励まし、隣人をも励ましてこられたことだろう。

氏は復員され、松村先輩（ターナー色彩 社主）を助けることで、日常を築かれる。

「冬の杓子尾根へ行かれた由」（1960年1月15日付）から始まり、翌年2月5日付メモで終わる約1年は文字通りの東奔西走、超過密の営みを持たれる。

帰国され、職を得られてからは、ほとんどゆっくりされたことは無いのではないか。

出張の折りの移動の列車の中が、最もゆったりされる黄金の空き時間であったかも知れない。度のきつい近眼鏡を通して文庫本に没入されるお姿が想像できる。

シャカリキという言葉がある。釈迦力というようなイメージが元にあったのだろうか。張りめぐらされた高性能のアンテナ、それでも足りない時は臆することなく知己を頼られる積極果敢、見事なまでの情報活動。

内部的な問題で少し気落ちされることもあったが、励ましを得てやがてそれも乗り越えて行かれる。

縁あって市大で山をかじらせていただいた身としては、このファイルは子々孫々に伝えてゆくべきバイブルのように思う。

―「整理を担当してくれた清原氏も今はいない。冥福を祈る次第である。」

(廣谷光一郎。2001. 5. 12記)

*廣谷氏インタビュー (その1)

実施日：2008年4月15日

聞き手：奥田寛 (会報担当)

―このたび、「森本レター・ファイル」が廣谷さんから山岳会に移管されることになりました。当該文書は、「ランタン・リルン遠征」実現に至るまでの、森本さんの直の声を知る貴重な資料です。ただ、なにぶん半世紀ほど前のものです。引き継ぎにあたり、当時の状況等補足説明が望ましいと判断し、インタビューさせて頂くことにいたしました。時系列でうかがいます。

「始動の時期」(昭和35年1月の書簡)について

＜冬は杓子尾根へ行かれた由＞(1/15付の書簡)

・4人パーティで7000m峰遠征、との話がある先輩から…

―最初の書簡を拝見すると、大変親密なように感じます。どのようなお付き合いだったのでしょうか？

廣谷 現役の時や卒業後も山行を共にしてきていました。私の結婚式にも、父と同級生だった栗飯原さんとともに出席して頂いているのですよ。

―書簡の中にヒマラヤ研究会のことが出てきますが、どのような活動内容でしたか？

廣谷 私は、卒業後は東京ということもあり、よく分かっていません。森本さんからは「やっているよ」「本読んどけよ」との連絡をもらっていました。

＜お手紙有難う(隊の構成)＞(1/20頃?の書簡)

・「森本氏が行く」との条件が出てきている…

―この時点では、森本さんは行くつもりではなかったようですね。

廣谷 そうだけれど、書簡にあるように「いざというときには大橋氏・三島氏・森本氏のうち誰か一人が必ず行く」という暗黙の了解が三者間にあったように思う。

ともかく、森本さんはよく研究しておられたよ。

一発端はOBのスポンサーが付くことからだったようですが、大学創立80周年を念頭におくことはなかったのでしょうか？

廣谷 そういうことはあったかも知れないが、きちっとしてからでないと持っていけないからね。あまりこだわっていなかったと思う。

一そうすると、そのOB（池田正男氏）が火付け役となられたわけですね。

廣谷 全くその通りで、火付け役という重要な役割をされたと思う。

〔参考〕2月の動き：・「タルン・ピーク（7349m）登攀計画原案」（2／5付）

・山岳会臨時総会においてヒマラヤ遠征実行委員会が結成（2／23付）

～「ランタン・リルンー7246m」62頁（大阪市立大学山岳会。昭55.10刊）～

「情報収集活発化の時期」（昭和35年3月の書簡）について

＜嘉治先生から深田（久弥）氏に紹介＞（3／18付の書簡）、

＜深田さんとお苦勞さま＞（3／20付の書簡）、

＜廣谷君に（東京で）大体話して貰うこと＞（3／30以前の書簡）

＜いろいろとお苦勞さま（シェルパ、アプリケーション）＞（3／30付の書簡）

一この時期、目標とする山の決定を急いでおられましたね。

廣谷 翌年プレモンスーン期に遠征隊を派遣するためには、日本山岳会に4月中に計画書を提出する必要がある、そのためには4月5日頃までに目標の山を決定しなければならなかった。

一嘉治先生は山岳部長だった方ですか？

廣谷 大阪商大山岳部時代の山岳部長で、当時は東京におられた（東大社会科学研究所教授）。森本さんが先生に依頼し、先生を通じて深田久弥氏を紹介していただいた。

以降、吉沢一郎氏、そして日大OBの佐藤耕三氏から金坂一郎氏、今西寿雄氏から日大OBの松田雄一氏、深田氏から写真家の風見氏など、ヒマラヤ学識経験者の意見と資料（国内外）を精一杯収集しました。といっても、手探りの状態でした。

一わらをもつかみたいという情報不足で、探検的な要素が強かった訳ですね。

廣谷 まだまだ情報の少ない時代であり、今思えば本当のエクスペディションだったと思う。だって、翌年カトマンズに滞在していても、ガネッシュは分かってもリルンはどこか分からなかった（シェルパも含めて）。実は見えていたのに。

一そういう中で、山の絞り込みがすすんでいったのですか。

廣谷 結論としては、ランタン・リルン（ネパール）とティルスリ（インド）の二つのプランを作っておいて、その時ネパールに遠征していた3隊のシェルパ問題の解決方法を見て、4月中にどちらかに決定することになりました。

一シェルパ問題とは、どのようなものだったのですか？

廣谷 当時は、旧来のダージリンシェルパ組合と新興のカトマンズシェルパ組合という二つのグループに分かれており、ネパールの山はカトマンズシェルパを使うのがアプリケーションの第1条件とされていました。つまり、ティルスリはダージリンシェルパを雇用できるので良いシェルパの確保が可能であるが、政治情勢で入山許可が本当に取れるか分からない。一方、ランタン・リルンは入山許可は取れそうだが、当方として良いかどうか不明なカトマンズシェルパの雇用を求められる。せめてサーダーは優秀なのをダージリンから連れて行きたい、となればごたごたする。このような状況がありました。一アプリケーション関係はどのように活動されていたのですか？

廣谷 体協と日本山岳会は私、大蔵省や外務省は橋本氏、と分担して動いていました。また国外については、当時ネパールは日本大使館がなかったの、当地滞在の唯一の日本人 正垣教授（京都府立医大）にお願いする、というようなことをしていました。一国内の渉外活動が大変だったと聞いています。

廣谷 今と違い、当時は渡航外貨の持ち出し制限があり、スポーツ外貨枠で割り当ててもらわないと行けなかった。

＜飯田隊・寺畑氏に問い合わせの件（食料関係）＞（日付不明の書簡）

廣谷 食料は日本から持っていくというよりは、できるだけ現地食中心を考えており、その可能性についてランタンヒマールへ入った飯田隊に問い合わせました。

「具体化に向けて加速した時期」（昭和35年4月の書簡）について

＜いろいろと御苦勞さま＞（4/6と思われる書簡）

・現状（ランタンに決めたいが）／シェルパ／ガルワル／関西登高会の候補の山／
動いて貰いたいこと／大島健司／泉氏の意見／第3候補の山（ヌブチュ）

一ランタン・リルンになりそうな気配ですね。

廣谷 今だから言うと、個人的には、出来ればティルスリに、という気持ちがあった。一大島さんは当時インド（ボンベイ）駐在でしたね。連絡するのもなかなか大変な様子が伺えます。準備段階ではどのような役割を担われたのでしょうか？

廣谷 カトマンズまで飛んでもらう、またはニューデリーにってもらおう、ということ森本さんは考えておられた。実際にはその必要がなかったけれど。本番で頑張ってもらおうということだった。

一この時期、森本さんは、泉さんはじめ2、3の先輩方に「ランタンはちょっと悪い。」と言われていました。確実に登頂できる見込みの山が他にないか、との投げかけですね。

廣谷 確実に登頂できる見込み云々は1989年の四光峰の時でも言われましたよ。

一まあ、送り出す側の気持ちなのでしょうね。

……………（以下 次号掲載）……………

日本100名山を完登して

澤井 弘忠

なんとなく気恥ずかしい気持ちで、稚拙な文章を100名山の思い出として少し書いてみます。

100名山を意識して登り出したのはいつ頃だったか、1991年の東京転勤からだと思います。東北、北海道が比較的近くになったことが動機付けになったと思います。

振り返れば、14歳(1961年)の夏に初めて木曽の御岳に父に連れられ登ったのが、結果として100名山の最初でした。このころ小生は体が弱く、途中で高山病になり貧血を起こしたのも思い出です。父に足から逆さにぶら下げられ回復したのです。最後は2007年9月利尻岳でした。実に46年目によりやく達成したことになります。

国内で大勢の方が達成されて居られますし、ことさら言う事ありませんが、終わってみればあっけないような感じがしております。われわれ団塊の世代は、ずっと競争の熾烈な年代であります。100名山完登の意味は無いのですが、とにかく目標設定しそれに向かい集中するそのことがなんといひますか楽しいのでしょうか。少し変だとは思いますがそのようでした。一山づつつぶして行く快感、計画する喜び、地図を見る楽しさ、又次々に登りたい山がでてくることが100名山の楽しみでした。

新緑の山、紅葉の山、雪の山、色々な表情の四季折々の山々に、日本に生まれてよかったとつくづく感じるがあります。また日本全国に散らばっており、南北に縦長ですのでそれぞれの特徴があって、そのこともおもしろいとおもいます。人それぞれに自分の山を自分のスタイルで好きに登ればと思っています。大学山岳部では岩と雪が本流であり、100名山登山自体は格下の行為だと思われるようです。それでもそれなりに楽しかったのも事実です。中学校までは父の醍醐登山会、京都府立洛東高校は登山部、大学山岳部、社会人になってからは博多駅前山岳会、とそれぞれの充足した時間を共有できた仲間が出来たこともとても嬉しく思っています。

ただひたすらピークを目指してゆきますので悔いの残る山々もあります。登山過程をまったく無視して伊吹山など30分で終了とか、霧が峰や美ヶ原、八幡平などはどれが山なのかははっきりしない達成感の無い山というか高原もあります。一方 屋久島宮之浦岳は本格的な沢登り(翁沢)で3日かかりましたし、飯豊山も梅花皮沢雪溪から3日でした。

小生がもっとも気に入っている山は鳥海山とトムラウシであります。鳥海山は日本海を眼下に素晴らしく雄大な山です。北海道・大雪山系のトムラウシも忘れられません。北のクワンナイ川からと南のトムラウシ川から2回行きました。オショロコマの入れ食い、人の少なさ また川に自噴する温泉、初めて経験する楽しい沢登りでした。9月にはぜひ大雪山・黒岳のすごい紅葉を楽しみたいと思っています。

さて、次なる目標ははっきりと決まっていますが、何でもありの山登り、200名山、温泉付き山登り、又今年から冬は小笹スキー学校、沢登り、雪山等、節操の無い登山をしたいと思っています。今は山に行きたくて仕方がありません。休みがあれば必ず山に行きます。最もハイキングですが。まあしかし、この年令まで山に行っていてよかったとつくづく思います。これからも一生山に行きたいと考えています。最近の我が先輩方々のすごいご活躍にたく刺激を受けておりまして、海外の山も含め気の向くままどんな山でも行きたいと考えております。

まあ、人がなんと言おうと自由に残された人生を山とともに過ごしたい、と思っております。

日本百名山登頂全記録

OCUAC 澤 井 弘 忠

登頂順	公式N	山 名	登 頂 日	同 行 者 & Comments
100	1	利尻岳	2007.9.6	山本
11	2	羅臼岳	1966.12	大阪市大山岳部1年冬山合宿 山田さん 小林さん 春野さん 二上
95	3	斜里岳	2007.6.13	山本 雪渓多く来たアルプスの5月山 唇負傷 15針縫う
96	4	阿寒岳	2007.6.14	山本 雌阿寒岳 雨
58	5	大雪山	2003.7.11	旭岳 雨
55	6	トムラウシ	2000.8.16	8/13-8/17 山本 クワナイ川遡行 イワナ入れ食い 最高の滑
97	7	十勝岳	2007.6.15	山本 頂上まで休みなし2:40
51	8	幌尻岳	1999.8.13	8/11-8/15 山田 山本 新冠川遡行 1968年来の悲願達成 最高の天気 岩魚3匹 沢グレード3級上
98	9	後方羊蹄山	2007.7.5	高度差1600m キツイ山
74	10	岩木山	2006.6.30	ドライブウェイ終点より
75	11	八甲田山	2006.7.1	終日雨 酸ヶ湯に下る
33	12	八幡平	1995.9	だらっとしたピーク
78	13	岩手山	2006.7.22	単独行 馬返しよりピストン終日雨登り4時間下り3時間ひたすら登る
32	14	早池峰	1995.9	早池峰ウスユキ草美しい 勾配強し
66	15	鳥海山	2004.8.12	湯の台より往復11時間 鳥海アザミと雄大さ素晴らしい
59	16	月山	2003.8.15	山頂が月山神社 入場料一人500円
37	17	朝日岳	1996.8	西村夫妻
83	18	蔵王山	2006.8.19	阿蘇の雰囲気
30	19	飯豊山	1994.8	博多駅前山岳会 山本
62	20	吾妻山	2004.6.19	西吾妻山 プッシュピーク途中 池塘美しい
82	21	安達太良山	2006.8.18	おっぱいピーク 硫黄臭強し
61	22	磐梯山	2004.6.18	結構きつい山
54	23	会津駒ヶ岳	2000.4.1-2	松原 川口 桜枝岐温泉 民宿”やまね”食事良好 雪多く終日ワカン山スキーヤー多し
70	24	那須岳	2006.5.3 4 5	朝日岳 茶臼岳 朝日登り雪渓2箇所危険 三斗小屋温泉煙草屋
35	25	筑波山	1996.2.17	山本武雄夫妻 兵頭 大雪の為他の登山者2名のみ
52	26	燧ガ岳	1999.9.4-5	松原 川口 青田 尾瀬沼長蔵小屋にて宿泊 夕方の尾瀬沼が幻想的
94	27	至仏山	2006.11.3	3連休高速道路渋滞11:00鳩待峠 頂上14:00 鳩待峠16:40
42	28	武尊山	1998.11.22	稲垣 川口 積雪あり 川場尾根より往復 不動岩鎖場危し
71	29	赤城山	2006.5.14	単独行 黒松山 駒ヶ岳
65	30	男体山	2004.7.9	裏男体より
46	31	奥白根山	1999.4.17	山田 稲垣夫妻 川口 青田 萩原 湯元温泉よりピークアタック 雪多し10時間アルバイト
72	32	皇海山	2006.6.10	単独行 群馬側皇海橋からピストン
15	33	魚沼駒ヶ岳	1967.11	大阪市大山岳部2年 秋山偵察山行 奥田 澤田
86	34	平ガ岳	2006.9.7~8	稲垣夫妻自宅3時発 取り付き8:15~ピーク3:00 登り7ピッチ 足がつるも姫の原地塘素晴らしい朝寒い
16	35	巻機山	1968.3	大阪市大山岳部2年 越後三山春山合宿
31	36	谷川岳	1995.8	兵頭 稲垣夫妻
76	37	雨飾山	2006.7.16	単独行 雨飾山荘より 大雨
67	38	苗場山	2004.8.21~22	送別登山 稲垣夫妻 青田 大下 立石 地塘が素晴らしい
63	39	妙高山	2004.7.3	単独行 川那邸より6:40燕温泉3:20帰着 きつい山 足がつる
49	40	火打山	1999.6.19 20	単独行 笹が峰 上沼ヒュッテ 火打山 黒川小屋TS 笹が峰 梅雨最中 小雨 花 綺麗 夏
92	41	高妻山	2006.10.21	単独行 川崎3:00-戸隠牧場6:50-頂上11:30-牧場15:30-川崎20:00 紅葉素晴らしい
60	42	草津白根山	2004.5.1	ピーク不明
64	43	四阿山	2004.7.4	単独行 菅平牧場より根子岳経由8:00出発 1:30帰着
38	44	浅間山	1997.8	単独行 禁止登山エリア 暑い 火山ガスきつい
48	45	両神山	1999.5.16	稲垣夫妻 川口 立石 落合橋よりピストン

41	46	甲武信岳	1998.11.1	稲垣 川口
50	47	金峰山	1999.6.26	稲垣夫妻 松原 杉浦部長 近辺3山ではもっともアルプスの金峰小屋より上は這松帯
40	48	瑞牆山	1998.9.26	単独行 小雨 上部奇岩 往復5.5時間
36	49	雲取山	1996.3	単独行 三条の湯からピストン
45	50	大菩薩嶺	1999.3.14	川口
14	51	白馬岳	1967.8	大阪市大山岳部2年 剣池の谷夏山合宿後縦走清水谷廻行 大島 澤田
57	52	五龍岳	2001.5.4	松原 川口 5/3~5/4唐松から縦走 川口雪盲
19	53	鹿島槍岳	1969.3	大阪市大山岳部3年 鹿島天狗尾根春山合宿 東尾根下山 広瀬 二上
13	54	剣岳	1967.7	大阪市大山岳部2年 剣沢夏山合宿
17	55	立山	1968.8	大阪市大山岳部3年 剣池の谷夏山合宿後縦走
4	56	薬師岳	1964.7	洛東高等学校2年登山部夏山合宿
18	57	黒部五郎岳	1968.8	大阪市大山岳部3年 西村 和田 剣池の谷夏山合宿後縦走
6	58	黒岳	1964.7	洛東高等学校2年登山部 夏山合宿
5	59	鷲羽岳	1964.7	洛東高等学校2年登山部 夏山合宿
3	60	槍ヶ岳	1963.7	洛東高等学校1年登山部 夏山合宿
2	61	穂高岳	1963.7	洛東高等学校1年登山部 夏山合宿
89	62	常念岳	2006.9.23 24	稲垣夫妻 一の沢を行く常念小屋TS 高度差1900Mを行くもすばらしい
12	63	笠ヶ岳	1967.6	大阪市大山岳部2年 個人山行 笠ヶ岳第一岩稜 小林さん
79	64	焼岳	2006.7.29	単独行 中の湯からの北峰へのピストン 終日雨 川那邸にて宿泊
29	65	乗鞍岳	1988.8	ドライブウェイより 家族旅行
77	66	美ヶ原	2006.7.17	単独行 王ヶ頭 王ヶ鼻 強風雨 一人も会わず
68	67	霧ヶ峰	2005.5.1	山本夫妻
39	68	蓼科山	1998.9.12	村田夫妻 山本夫妻
24	69	八ヶ岳	1980.1	博多駅前山岳会 行者小屋冬山合宿
44	70	丹沢山	1998.6	単独行 塩水橋より天王寺尾根
10	71	富士山	1966.11	大阪市大山岳部1年 富士山アイゼン合宿
69	72	天城山	2005.9.3	万二郎岳(1300m)から万三郎岳(1406m)からゴルフ場へのシャクナゲルート廃道
1	73	御岳	1961.8	醍醐登山会 父と
22	74	木曽駒ヶ岳	1975.12	大阪市大山岳会 伴さん 奥田さん 後藤 澤田 木曽側からラッセル
99	75	空木岳	2007.8.12	木曽駒が岳から越百山までの縦走 山本
93	76	恵那山	2006.10.28	単独行 広河原よりピストン 6:50取付 9:50頂上
43	77	甲斐駒ヶ岳	1998.12.28	川口 サレワアイゼン折れる
34	78	仙丈岳	1995.10	博多駅前山岳会 小仙丈沢廻行 3級 大下 山本
53	79	鳳凰山	2000.1.15-16	川口 稲垣亮子 体調不良ぎりぎりのアタック 穏やかな山天気最高
26	80	北岳	1982.12	博多駅前山岳会冬山合宿 大下 山本 鈴木 永松他
27	81	間ノ岳	1982.12	博多駅前山岳会冬山合宿 大下 山本 鈴木 永松他
28	82	塩見岳	1987.1	主稜登攀 這松帯にてビバーク 大下 片岡
9	83	悪沢岳	1966.8	大阪市大山岳部穂高合宿後縦走 梅島 兵頭
8	84	赤石岳	1966.8	大阪市大山岳部穂高合宿後縦走 梅島 兵頭
7	85	聖岳	1966.8	大阪市大山岳部穂高合宿後縦走 梅島 兵頭
91	86	光岳	2006.10.8-9	稲垣亮 快晴 890M~2450M静高平まで8P 消耗でもいい路であった
47	87	白山	1999.5.4	山本(政)
90	88	荒島岳	2006.10.1	単独行 10時10分取り付き3時10分下山 終日雨
73	89	伊吹山	2006.6.17	単独行 ほぼ頂上まで車
85	90	大台ヶ原山	2006.9.3	単独行 日出ガ岳から大蛇峠方面周遊素晴らしい
84	91	大峰山	2006.9.2	単独行 弥山 八経ヶ岳(関西最高峰)奥駆道は素晴らしい。
20	92	大山	1973.1	大阪市大山岳会 後藤 広瀬 澤田
80	93	剣山	2006.8.13	山本
81	94	石鎚山	2006.8.14	山本 頂上めぐり
21	95	九重山	1974.8	安宅福岡支店 川那 小沢 椿原 伊藤 藤田 他
25	96	祖母山	1981.9	博多駅前山岳会
23	97	阿蘇山	1979.5	博多駅前山岳会 鷲ヶ峰登攀
87	98	霧島山	2006.9.15	川那 福田 梅居 韓国岳から大浪池へ
88	99	開聞岳	2006.9.16	単独行 渦巻状の道 猛烈に暑し Tシャツが絞れた
56	100	宮ノ浦岳	2000.11.4	博多駅前山岳会 山本 大下 松原 安房川右股翁沢 第1級の沢 大下滑落 澤井左膝炎症



大山北壁別山バットレス中央



北壁全景



ペリトモレノ氷河と展望



パイネの角（テント場より）



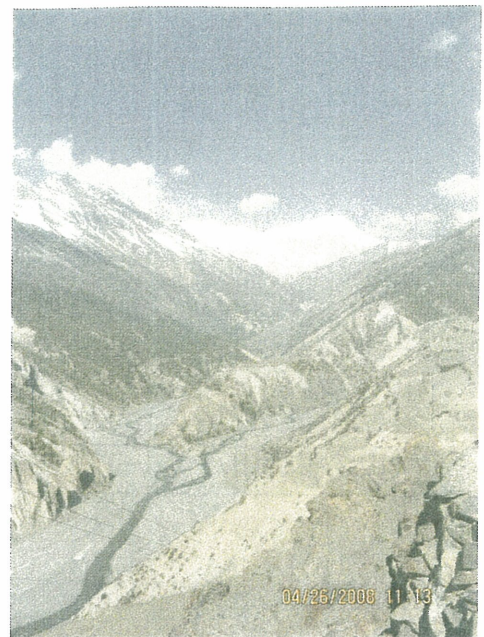
パイネの角（プデトより）



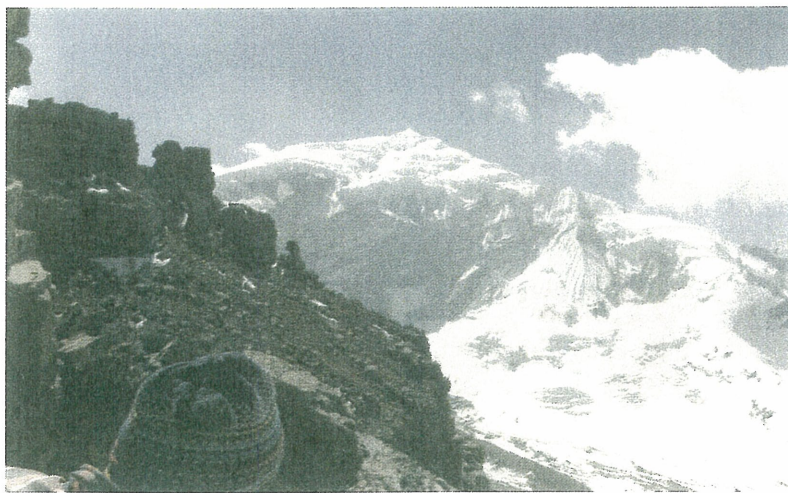
マナン村とティリツォ・ヒマー



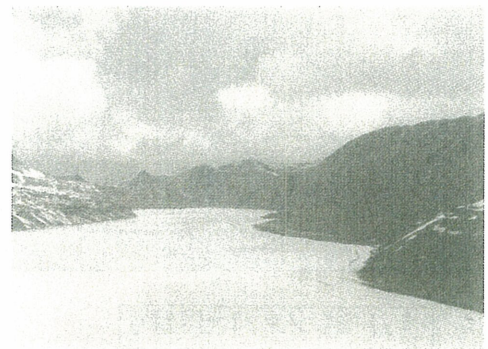
ピサン・ピーク



カンサル・コーラとマルシャンディ川(手前)
奥にティリツォ・ヒマール



チュール・ウエスト (登路は左から)



凍結中のティリツォ湖

編集後記

- ・今年2月に「遠き雪嶺」(谷甲州著。角川文庫上・下)を読みました。この本は、戦前の立教大学山岳部のナンダコット登頂に至る道のりを描いた小説です。読みすすむうちに、つい「ナンダコットの歌」を口ずさんでしまいました。
- ・「森本レター・ファイル」を読んで、同期である森本・三島・大橋三氏の強い想い(「何としてもヒマラヤ遠征隊を出す」)を感じました。それが、森本氏＝ランタン・リルン隊長、三島氏＝“幻のランタン・リルン隊”隊長、大橋氏＝四光峰のプロモーター、という形に現れたと思います。
- ・森本さんの夢はメンルンツェの由。リルン後はさぞかし楽しそうにメンルンツェを語られたことだと思います。聞くこと叶わず、残念です。(奥田 記)